

# 大道寺 繁禎（だいどうじ・しげよし）

## 1、プロフィール

幕末から大正中期の旧派歌人。津軽藩最後の家老として維新の動乱時に対処、政官財界の重鎮となった。また、歌会を主宰するなど本県文壇史上、見逃せない働きをした。

<生没>

1844(弘化元)年6月10日 ~ 1919(大正8)年11月23日

<代表作>

『津軽名所歌集』外崎則守篇『三師の面影』

<青森との関わり>

明治維新時の津軽藩家老。第59国立銀行初代頭取となり、県議会議長や中津軽郡長、弘前図書館長他の要職に就いた。

## 2、作家解説

楸舎、又は楸園と号した旧派歌人。弘化元年に津軽藩家老大道寺順正と母美武の長男として生まれた。幼少から学才はあったが身体が弱く、儔之進、族之助、族などと改名した。元治元年、長利仲聴から国学、祭式、和歌を学ぶ。文化2年、父死亡により慶応4年に家老心得として江戸に出て間もなく家老となる。

江戸では近衛忠熙や佐々木弘綱(信綱の父)について歌道を学び、高崎正風や阪正臣らと親しく交わり、いわゆる「お歌所派」の人々の知遇を得た。

津軽藩最後の家老として維新直後の動乱期に版籍奉還の中心にあり、その後の士族の授産のために養蚕や津軽焼などにも力を尽くした。後には第59国立銀行頭取や弘前電燈(株)社長、初代弘前図書館長など政官財各界で活躍した。しかも、私財を投げうって事にあたり、「清水居」と名づけた小さな屋敷で清廉な一生を送ったといわれる。

文学方面では長利仲聴の後継として、その主宰していた就将吟社の指導をし、自らは林葉吟社を起こし、東奥日報新年募集歌の選をするなど歌道奨励に尽力をした。その歌は比較的平板であったが、「開文雑誌」「弘前新聞」「大正報」「東奥日報」他の地方誌紙に作品を発表した。また、『千代田歌集』『明治歌集』『明治花月歌集』『やまとにしき』などの中央の歌集にも選ばれ、その門下は数百人を数えたという。

『津軽名所歌集』他を編み、晩年は弘前の新聞「大正報」に連日 10 首を2年間にわたって発表したといわれるが、「陸奥史談会」という本県では初めてと思われる郷土史研究団体を作るなど八面六臂の大活躍をした。大正8年、狭心症のために逝去した。

### 3、資料紹介

#### ○『大道寺繁禎和歌集』

図書

1986(昭和 61)年2月1日

210mm×149mm

「明治歌集」「いはきね」「三師の面影」の三部構成で、ほかに繁禎の作詞した藩祖三百年祭の記念の唱歌が収められている。横山武夫が「大道寺繁禎和歌集に寄せて」の一文を寄せている。(株)角弘百周年記念事業の一つとして編集された。